

計画1-3

ニホンザル地域個体群のモニタリング・

システムの開発

羽山 伸一（日本獣医畜産大・野生動物）

ニホンザルの地域個体群版レッドデータブックを作成するために、リアルタイムでの地域個体群の現状把握とそのモニタリングを行う手法について検討した。

まず、霊長類学会、霊長類研究所共同利用研究会などを利用して、全国各地でニホンザルを観察し、その保護管理に関心のある人（モンキー・ウォッチャー）の名簿を作成し、地域個体群別にウォッチャーの有無を確認した。これにより、おおむね東日本では分布が孤立化していることもあって、ほとんどの地域個体群の情報が得られることがわかった。

この調査によって、地域個体群に対するウォッチャーの空白地域が明確になったので、その地域のウォッチャーの発掘と、地方自治体に対するニホンザル調査の要請を行う必要がある。また、東日本では、順次、各地域個体群の現状報告書（ステイタスレポート）をウォッチャーに公表してもらい、IUCNの基準に準じて地域個体群の現状評価を行える見通しが立った。

計画1-4

野生ニホンザル群の糞中空素濃度からの

摂取蛋白質濃度の推定

前野 恭子（日獣畜大・獣医・野生動物）

野生ニホンザル群の栄養状態を評価をする手段として、本研究では、摂取した蛋白質の指標となる糞中空素濃度に注目した。使用した群は、餌としての農作物に対する依存度が異なると考えられた2群を用い、それらの群からランダムサンプリングした糞の窒素濃度をケルダール法により測定した。また、飼育下のニホンザルの試験では、前回、糞中空素濃度から餌の窒素濃度（以下、摂取窒素濃度）を推定することが可能であると示唆されたが、摂取繊維濃度による糞中空素濃度の影響を補正するために今回は糞中の酸性データージェント繊維濃度（以下、ADF）Van Soestらの方法により測定した。

野生群の実験では、神奈川県に生息する丹沢群と農作物への依存度がより高い箱根群の糞中空素濃度を測定したが、季節および2群の平均値の間に有意差は見られなかった（ $P > 0.05$ ）。また、飼育下の試験では、糞中ADFによる消化率から補正を行い、推定の摂取窒素濃度をもとめが、実際の摂取窒素濃度との相関係数と、前回は糞中空素濃度と摂取窒素濃度との相関係数との間に有意差は見られなかった（ $P > 0.01$ ）。したがって、ニホンザルにおいての摂取窒素濃度の推定は、糞中空素濃度のみでも可能であるということが示唆された。